

福臨技企画 1

「“New Normal” 新たな時代を迎えて～新型コロナウイルス感染下における技師会活動の今後～」

沖縄県臨床検査技師会のこれまでのとりくみと今後の課題

◎安里 光宏¹⁾

社会医療法人敬愛会 中頭病院¹⁾

沖縄県では2020年2月14日に初めてコロナ感染症が確認されて以降、人口10万人当たりの感染者数は全国最多の状況を幾度となく繰り返してきた。過去に類を見ない感染の爆発により人々の生活は様変わりし多くの制約を課せられる事態となり、沖縄県臨床検査技師会も同様に技師会活動全体に影響を受ける形となった。沖縄県臨床検査技師会理事の構成は、そのほとんどが県内の主要病院に勤務する検査部門の代表者であり、感染流行当初は各々の施設のPCR検査確立に翻弄しており技師会活動も捗らず苦慮する現実直面していた。その打開策としてまずは毎月行う理事会会議をZoomミーティング形式へ移行した。その中で各施設との情報交換もスムーズに行えるようになった結果、各施設のPCR検査の普及が一気に進んだような感を受けた。またコロナ禍の中での会員の技術向上のために、各部門研修会もリモートを取り入れるようになった。離島圏で地理的制約のある当会の会員にとってこの取り組みは、コロナ禍以前より多くの会員が参加できる環境となったのは確かである。

様々な制約がある中、沖縄県臨床検査技師会にとっての最も大きなイベントは、2021年度日臨技九州支部医学検査学会の沖縄県での開催であった。前年度担当の宮崎県は開催へ向け着々と準備をしている中、コロナ禍の影響を受け学会の開催自体を断念。沖縄県は宮崎県の分までとの思いで、日臨技九州支部学会の開催へ向けて取り組みを行った。学会執行部としては当初、可能な限り現地開催を求めていたが、一向に収まらないコロナ感染症の影響で最終的にはWeb開催を選択した。一般演題は各演者が事前収録し、特別講演や特別企画については当日現地収録し、その後Web配信を行った。Web開催としての学会は九州支部全体の協力もあり、会員1,094名の参加で幕を閉じた。

離島を多く抱える沖縄県にとって今回の経験は、学会や研修会等で県内の地域格差を無くす有効な手段を見つけた形となった。会議やその他イベントの開催に関しては今後選択肢が広がっていくものと予想される。

福臨技企画 1

「“New Normal” 新たな時代を迎えて～新型コロナウイルス感染下における技師会活動の今後～」

新型コロナウイルス感染症発生を契機とした これからの技師会活動

◎馬渡 裕康¹⁾

一般社団法人鹿児島県臨床検査技師会 副会長¹⁾

これまで、鹿児島県臨床検査技師会は研修会開催及び県民に対して公益事業等を行ってきた。しかし、2020年から始まった新型コロナ感染症（COVID-19）の流行と、度重なる緊急事態宣言やまん延防止重点措置により、技師会活動の自粛を余儀なくされた。

組織活動の会員交流活動、各種団体との連携による公益活動も自粛又は Web 開催となったが、感染対策の一環として PCR 実技研修、ワクチン打ち手研修会などを開催した。なかでも「新型コロナウイルス感染症検査サポートチーム」を設置して、県内の医療機関や施設に臨床検査技師を派遣し、検体採取及び PCR 検査等を実施し医療支援を行ったことだ。

学術活動においては、感染状況を考慮しながら開催方法を模索する状況が続いた。例年、鹿児島県 6 地区及び学術部門での研修会が 25～30 件開催されていたが、2020 年では 6 件、2021 年においては 7 件になった。現在までの活動や開催方法は Zoom 等を用いた Web 開催が中心になっている。

Web での活動は当初不慣れな点が多かったが、会場まで足を運ぶ手間がかからず、ネット環境さえあれば手軽に参加出来る点から参加者が増えてきている。また、当会においては離島地区があることから、従来の研修会形式を考えさせられる新たな変革と捉えている。今後は通常の活動及び開催が実施出来るようになると思うが、現地開催＋Web 開催が主流となるであろう。

令和 2 年に鹿児島県では基本的な感染対策を継続しながら、社会経済を推進する「新しい生活様式」の中、今後は周期的な波が繰り返すことを考慮し、ゼロコロナを目指すのではなく、コロナウイルスと共存できる生活スタイルを目指し感染予防・検査・治療の各段階で新たな手段を加え、備えを充実していく必要がある。

本シンポジウムでは、当会が行ってきた技師会活動内容を報告する。

福臨技企画 1

「“New Normal” 新たな時代を迎えて～新型コロナウイルス感染下における技師会活動の今後～」

新型コロナウイルスへの対応と技師会活動

◎花牟禮 富美雄¹⁾

独立行政法人地域医療機能推進機構 宮崎江南病院¹⁾

新型コロナウイルス感染拡大により、私たちの生活は一変した。技師会活動への影響も大きく、宮崎県臨床検査技師会（以下、宮臨技）でも、困難に直面し、出来る限りの活動を継続してきたので報告する。

<定時総会の開催>

2020年度は、書面表決書の提出を会員にお願いし開催することとした。会場は宮臨技事務所としたが、参加者の安全を考慮し、最終的には屋外で開催した。出席者は6名、それ以外は書面表決397名（総正会員数490名）で、定款の変更も無事に行うことが出来た。2021年度、2022年度は、書面表決書の提出をお願いするとともに電子的議決権の行使も可能として、Zoomを用いてWEBで開催した。

<理事会運営>

新型コロナウイルス流行初期は理事会の開催が困難で、メールでの協議と書面決議になることを予想した。宮臨技の定款に、理事会の決議の省略をする旨の規定が無く、定款の変更を行った。その後は、Zoomのライセンスを取得し理事会を開催出来るようになった。

<公益事業>

これまで参加していた「みやざき健康ふくしまつり」は開催が見送られた。日臨技の全国「検査と健康展」も2020年度は開催を見送ったが、2021年度は中央会場を担当することとなり、参加者数の制限、事前受付制、また、WEBも併用して現地で開催することが出来た。

<学術事業>

研修会は、Zoomを用いたWEB研修を行なっている。2020年度は、WEB（3研修会）、集合（1研修会）、2021年度は、WEB（23研修会）を実施し、11月に開催した「宮崎県感染症・微生物検査セミナー」は会場に参加者を集め、また、Live配信も行った。

<県学会の開催>

2020年度は日臨技九州支部医学検査学会を担当し開催する予定であったが中止。2021年度は県学会の開催を見送り、2022年5月、WEBで開催した。

<With コロナの活動>

WEBは何処に居ても参加可能であり、参加するための移動距離と時間は縮まったが、人と人との距離は遠くなったように感じる。WEBの利点は活かしつつ、直接会って対話できる機会を増やすことは今後の技師会運営にとって重要と考える。

福臨技企画 1

「“New Normal” 新たな時代を迎えて～新型コロナウイルス感染下における技師会活動の今後～」

New Normal ～新たな当たり前と共生することを考える～

◎田中 信次¹⁾

日本赤十字社 熊本健康管理センター¹⁾

【はじめに】

2020年から拡大した新型コロナウイルス感染症は私たちの生活様式を一変させた。家庭や職場ばかりではなく技師会活動にも大きな変化をもたらした。今回、新型コロナウイルス感染症の感染者が増加し、行事を中止、延期せざるを得ない時期を振り返るとともに、それでも技師会としての歩みを止めることなく状況に対応してきた事例から今後ウィズコロナといわれる時代に技師会がどう変わって行けるのかを考察した。

【経緯】

2020年2月より勉強会、講習会、理事会、祝賀会を中止または延期。2020年8月より研修会の再開を目指し、手始めに ZOOM での WEB セミナーのテストとして「新型コロナウイルス感染症検査について～PCR 検査を中心に～」と題し講演。その後自治体、熊本県医師会からの要請で COVID-19 関連検査講習会（LAMP 法研修と検体採取研修）を 9/19、9/26、10/10 の計 4 回開催し 87 名が受講。また自治体からの要請で 2021 年 7 月にワクチン接種講習会（熊本県歯科医師会主催）を 2 回にわたり 60 名が受講した。熊本県医学検査学会は、2020 年、2021 年は WEB 配信、2022 年はハイブリッド開催を行った。生涯教育活動（WEB 配信による研究部門研修会含む）は 2020 年度 15 件、2021 年度 37 件であった。理事会、常務理事会は ZOOM 会議にて行った。

【考察】

新型コロナウイルス感染症により技師会にとって活動を制限される期間でもあったが学会や研修会を WEB 配信で行うという新たな手段を手に入れた期間でもあった。家事をしながら講習を受けるというスタイルも可能であり、今まで参加できなかった会員への刺激にはなった。しかし ZOOM 研修、会議が増えることでスケジュールを管理する部署がタイトになり会務の改善が必要であるなど弊害も出ている。また学会、研修会での発表者の熱い思いを ZOOM 越しに感じるのか疑問である。今後の技師会は WEB の利便性と仲間との語らいを重視する方法をさらに考えていくことも必要ではないだろうか。学会では各県の発表者と今後の WEB 利用やコミュニケーションの取り方などを議論したい。

福臨技企画 1

「“New Normal” 新たな時代を迎えて～新型コロナウイルス感染下における技師会活動の今後～」

ポストコロナを考える ～技師会活動変革の時代（とき）～

◎丸山 晃二¹⁾

独立行政法人国立病院機構 西別府病院¹⁾

【はじめに】

新型コロナウイルス感染症により、大分県臨床検査技師会の活動は悉く延期あるいは中止となった。今回、現在に至るまでの当会の状況を紹介します。その経験から考え得た「技師会活動の今後」について報告する。

【活動状況】

<2019年度（2020年2月以降）>

- ・ 第51回県学会：中止

<2020年度>

- ・ 第52回県学会：Webにて第51回と同時開催
- ・ 部門研修会：10月以降 Zoom を使用し10回開催
- ・ 各種会議：7月まで集合、8月以降は Web 開催
- ・ 公益事業：「検査と健康展」含めすべて中止

<2021年度>

- ・ 第53回県学会：Web 開催
- ・ 部門研修会：Web・ハイブリッドにて21回開催
- ・ 各種会議：Web・ハイブリッド
- ・ 公益事業：「検査と健康展・RFL」→規模縮小し開催

【Web の利点と欠点】

利 点	欠 点
参加しやすい	ネット環境により画像・音声に不具合が生じる
会場確保の心配が不要	参加者の反応が分かりにくい
交通費など経費が削減される	レポート提出率が低い
	人間関係が希薄になる

【今後の方向性】

行政や企業がデジタルトランスフォーメーションを推し進める中、検査技師が乗り遅れることなく最先端の技術を習得し使いこなすことは必須であり、結果タスクシフト/シェアに繋がるものと考えます。技師会としても、その人材育成に取り組み、また活動に利用できる便利なツールは積極的に取り入れていくべきと考えます。今後はデジタルが主流の時代になると思われるが、当会では会員や他団体との交流を図るリアルな場も重要と考えています。

今後リアルの重要性を考慮しつつデジタルと使い分け、会員にとって有益な事業を展開していきたい。

福臨技企画 1

「“New Normal” 新たな時代を迎えて～新型コロナウイルス感染下における技師会活動の今後～」

新型コロナウイルス感染下での技師会活動の今後 長崎県臨床検査技師会からの報告

◎門脇 和秀¹⁾

みさかえの園総合発達医療福祉センター むつみの家¹⁾

私は令和2年5月30日に会長に就任しました。新米会長としては、何事も例年通りに進めていけるのであれば良かったのですが、すでに新型コロナウイルス感染拡大傾向にあり、どのように技師会活動を行えばよいのかスタート時点から悩み続ける日々でした。会議については、比較的早い段階で ZOOM ミーティングの情報を入手できたので、滞らせることなく開催することが出来ました。問題は勉強会や研修会が開催されないことでした。そのような中、“我々が技師会活動を停滞させないために今できること”について常任理事に自由に意見を出していただき検討しました。その結果として新たに始まったのが「長臨技 Web セミナーの開催」と「長臨技ニュースの発行」でした。「長臨技 Web セミナー」は学習する機会が激減した状況をどうにかしたいという思いから生まれたもので、ZOOM ミーティングを使用して開催しました。また、“技師会での集まりが全くなく、情報が伝わってこない” “どの施設に新人技師がいるのかを知りたい” という要望から生まれたのが「長臨技ニュース」です。今まで会議内容を迅速に伝えるための「長臨技速報」を印刷して配布していましたので、それは継続し、新理事挨拶や新人技師紹介などを別途デジタル版として、写真等を使い見やすい形にしてホームページ上に掲載しました。

With コロナの技師会活動においても、Web の使用は切り離せないと思っています。Web セミナーの利点を多くの方が実感しています。しかし、Web での聴講のみでは会員間の交流が得られず、関係性が希薄になる傾向があります。そこで、会議や聴講のみの研修は Web 開催とし、実習やグループワーク、交流行事の場合は集合形式にするというのが良いと思っています。私は PC 画面での会話より、リアルに会って会話する方が何倍も楽しく感じます。また、会員間の交流の代わりとして始まった長臨技ニュースですが、リニューアルを含めて再検討していく予定です。今後はホームページやメールの利点を生かし、迅速な広報活動に努めます。更にペーパーレス化を進めていくことで、役員業務の効率化につなげたいと考えています。

福臨技企画 1

「“New Normal” 新たな時代を迎えて～新型コロナウイルス感染下における技師会活動の今後～」

新型コロナウイルス感染下における 佐賀県臨床検査技師会の取り組みについて

◎森 隆之¹⁾

ハートラボ¹⁾

2020年1月、日本国内で初の新型コロナウイルス感染者が確認され、3月には佐賀県でも初の感染者が確認された。2022年6月時点で、佐賀県での感染者総数は55,000人程と九州内では少ないものの、他県と同様に流行の波を繰り返している状況にある。

佐臨技定時総会は感染拡大後、現在までに3回開催している。感染拡大防止のため議案についてはすべて議決権行使による表決とし、参加者は理事・監事・総会役員などに限定し開催規模を縮小した。

学術事業の各部門研修会については2020年9月頃よりオンライン開催に向けた環境を整備し、2020年12月、試験的な目的も兼ね佐臨技主催により初めてのオンライン研修会を開催した。2021年1月には新型コロナウイルス感染症の検査体制や感染対策についてオンライン研修会を開催し情報共有を図った。その後、各部門研修会はすべてオンラインで開催し、2022年6月時点では集合による研修は実施していない。

県学会については、2020年は中止したが、2021年はオンライン形式にて開催した。2022年も同様の形式での開催を予定している。また、同日に、今年度のがん予防啓発事業の公開講演もWEB配信する予定である。

現在、理事会や各種委員会などもオンラインにて開催している。オンラインツールの利用により、移動時間もなく、参加者の負担軽減につながっていると思われる。

佐賀県臨床検査技師会は会員数330名ほどと全国の中でも会員数の少ない技師会である。新型コロナウイルス感染症の発生以前より会員数確保などが問題としてあがっていた。会員に必要とされる佐臨技を目指し、有意義な情報を提供できるよう各施設の現状把握を目的にアンケートを実施した。また、会員の利便性や情報発信の向上のためにホームページを更新した。現在、紙媒体での配布物見直しなどに取り組んでいる。学会当日はこれらの取り組みやアンケート結果などもご紹介したい。

福臨技企画 1

「“New Normal” 新たな時代を迎えて～新型コロナウイルス感染下における技師会活動の今後～」

新型コロナウイルス感染下における 福岡県臨床衛生検査技師会の活動と今後の展開～

◎大久保 文彦¹⁾、外山 洋子¹⁾、倉重 康彦¹⁾、池上 新一¹⁾
緒方 昌倫¹⁾、佐藤 謙一¹⁾、木村 賢司¹⁾、西浦 明彦¹⁾

一般社団法人福岡県臨床衛生検査技師会¹⁾

【はじめに】

新型コロナウイルス感染症の影響により、福岡県臨床衛生検査技師会（福臨技）の活動も2020年2月下旬より延期・中止とし、毎月のオンライン会議で方向性を模索してきた。その結果、2020年8月よりオンラインを用いた研修会を開始した。福臨技は4地区から構成され、各地区長のもとそれぞれの学術部門が地区の研修会を主催し、福臨技活動の根幹となる事業である。

【初期対応】

オンラインシステムの整備：当初は3アカウントで開始し、その後は各地区にそれぞれ専用のアカウントを設け地区長の管理とした。運用ルールの整備：操作方法は、運営者、参加者それぞれの運用手順を作成し、また様々な質問に対して質疑応答集を作成し随時アップデートした。現在は6アカウントで運用している。日臨技システムには、必ず研修会開催概要をPDFで掲載し会員への情報提供に努めてきた。

【福臨技が担当する学会】

第30回福岡県医学検査学会（参加者685人）：2020年12月にオンデマンドで開催した。第70回日本医学検査学会（参加者7691人）：2021年5月に現地開催を予定していたが、会期は延期することなくオンデマンドで開催した。第31回福岡県医学検査学会：2022年6月オンデマンドで開催中。第56回日臨技九州支部医学検査学会：2022年11月5日・6日に現地開催で準備中。

【研修会の回復状況】

各地区主催の学術部門研修会を新型コロナウイルス感染前の2018年度と比較すると、2018年度は、参加者6047人/210回（平均28.8人）、2020年度は2366人/63回（平均37.9人）、2021年度は4780人/109回（平均43.9人）であった。参加人数は79%の回復率であるが、参加平均人数は152.4%と増加し、今まで参加できにくい環境下の会員が参加できるようになったものと考えられる。

【今後の展開】

現在は運営側が企画し、会員へ情報提供しているが、各施設での日頃の問題点や課題について、会員どうして自由に利用できる双方向性のオンラインシステムの構築が課題である。